

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第123号 2025年3月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 現代私的院生事情(2)～博士課程編①	猪股 大輝	2
大東文化大学の管理運営についての理事会要請 — 昭和58年度学園運営方針から —	谷本 宗生	7
大正時代の女子高等教育(72) 金城女子専門学校(2)——金城女学校の厳しい道のり	長本 裕子	11
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(12): 『最新全国学校案内』(明治44年)(1)	吉野 剛弘	17
「未完の教授学者」としての長谷川乙彦⑧ —欧米への留学—	長谷川 鷹士	22
資料から見る「教育」の歴史①—『早稲田学報』—	山本 剛	26
刊行要項(2015年6月15日現在)		28
短評・文献紹介 さいたま市・片柳中学校のキャリア教育(谷本 宗生)、映画『こんばんは』(長本裕子)、シリーズ「あいだで考 える」の『ホームレスでいること』(富岡勝)		29
会員消息 谷本宗生、長谷川鷹、山本剛、富岡勝		31

コラム

現代私的院生事情(2)～

博士課程編①

いのまた だい き

猪股 大輝

2024年3月をもって東京大学大学院教育学研究科の博士課程を修了し、縁あって東洋大学に職を得た。私の専門は教育史（生徒会活動を中心とした教科外活動の成立史）である。先生方の温かいご指導や、運が向いたことなどもあり、異例ながら標

準修業年限（修士2年・博士3年）で博士論文提出まで進むことができた。ただし、年限内で修了した背景には、近年の大学院学生を取り巻く事情もある。コラムとして第119号では修士課程を取り扱った。今回は博士課程の生活と1年目までを扱う。

1. 修士課程と博士課程

2021年3月、修士課程を修了した。コロナ禍だったので修士で大学院を出る同期たちと一緒に写真を撮ることができたのがせいぜいだった。年度がかわり2021年4月、引き続き小玉重夫先生を指導教官として、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学コース博士課程に進学した。

博士課程の生活も大枠は修士課程と変わらない。①ゼミなど大学院の授業、②自身の研究、③様々なアルバイトの3つで構成される。ただ内実は変化する。博士課程になると本格的に将来の研究生活とアカデミック・ポストへの準備が始まる。①は研究全体の文脈が掴めてきて、より広範な研究を踏まえた発表が多くなっていく。また、修論生・卒論生へのアドバイスの機会も増える（卒論についてはコース内で院生がTAとしてアシスタントという名の丸抱えをする仕組みがあったが猪股は別のコース内業務の手伝いがあり担当しなかった）。②について、修士課程までの研究のゴールが修士論文の完成であったのに対し、博士課程では名の通った大手査読誌への論文掲載を目指す。勢い、自身の研究の一貫性よりも「査読」への通過を意識した研究の工夫が必要となってくる。③については、将来のアカデミック・ポストを見据え（特に教育学では）様々な学校での非

常勤を務める学生が増えていく。非常勤を始める前は、先輩などから紹介を受けられるかでヤキモキし、始めたら始めたで非常勤に時間を取られ研究が進まなくなる。結果から言えば、これらの変化に悩みながら博士課程3年間を送ることになった。

2. 博士課程1年目～入学から9月末まで

博士課程のスタートとともに、東京大学教育学部附属中等教育学校で週に2日、4年生（高1相当）3クラス（全クラス）に「世界史A」を教える非常勤講師を始めた。かねてより教育学をやるなら何かしら学校現場と関わらねばと思っていたところに先輩から紹介があった。また、アルバイトとして、本レター同人の田中智子さんの研究補助者と、学部時代の指導教員である湯川次義先生が所長として立ち上がった早稲田大学幼児教育開発研究所の事務局、修士課程から続けていたカメラマンを兼務した。教材準備等も含めて、週に丸3日から4日は、上記の諸々の作業に使うことになった。後述のゼミ活動や研究活動はこの他の時間で行うことになるが、それでも博士課程3年の中で一番時間があつた。

残ったあまり多くない時間で最初に始めたのは日本学術振興会特別研究員DC2の申請書執筆であつた。修士課程編で既述の通り、DCは博士課程学生の生活費・研究費支援プログラムで、採択されると毎月20万円の生活費と科研費を受け取ることができる。M2で申請できるDCⅠはDⅠからD3までの3年間、DⅠとD2で申請できるDC2は申請書提出の翌年度から2年間が採択期間となる。DCⅠの申請書提出は2020年5月のロックダウン真っ最中であり、十分に指導を受けないまま（これは私が受けに行かなかった所為である）、研究の柱を建てず、目先で明らかにすることはばかり書き連ねての不採択であつた。この点を反省し、DC2では小玉先生に積極的にご指導を仰ぎ、研究の柱を考えた。先生から教科外活動の「課程化」を問題としないさいとの助言があり、当時読んでいた木村元先生の『境界線の学校史』の図式に触発され、教科外活動の成立過程を子どもの遊びの「学校内化」（学校化）過程と捉える図式を着想した。四苦八苦し

ながら5月のGW明けに申請書を提出した。大変幸運なことに博論の構想がD1のこの時期に立つことになったが、慣れない申請書執筆にはGWまでのほぼすべての空き時間に取りられるなど、大きな労力を要した。また、採択と不採択のギャップがあまりに大きく、当時は暗中模索の中、キャリアパスにも大きく影響するように見えたので、心理的に強いストレスを感じた。

申請書を書き終えた後は参加していた小玉ゼミ、及び小国喜弘先生のゼミの発表資料準備に取り掛かった。小玉ゼミではゼミ全体の指定文献(2021年度春学期はイタリアの思想家ジョルジョ・アガンベン『私たちはどこにいるのか』)について、小国ゼミでは発表者が指定した文献を全体で読み合う形式でゼミが進んだ。小玉ゼミ生の間の勝手な風習として、ゼミ発表資料は関連文献も読み込んだ10ページ程度のもを用意する、というものがあつた。これに従い、D1の春学期の小玉ゼミではアガンベンについて、小国ゼミでは集団主義教育論で知られる大西忠治について、それぞれ文献を読みまとめた。自身の思考の幅を広げる良い勉強になったが、一本の資料を作るのに概ね3週間はかかった。DC申請書執筆と合わせ結果的に春学期はほとんど自分の研究は進まないままだった。

アルバイトや東大大学院のゼミ以外にも、博士課程の学期中は次の2つのことを続けた。一つは湯川先生の大学院ゼミへの参加であった。修士時に引き続き先生に参加をご快諾いただいたこと、コロナ対応でゼミがオンライン開講であったことが幸いして忙しい中でも継続して参加できた。先生がD1終わりの2021年度いっぱいをもって定年退職された後も定期的にゼミが開催され、結局、博士課程を通じてご指導頂いた。大学院の指導教員である小玉先生からは申請書執筆のときに書いたように研究の柱をご指導いただいたとすれば、その他の教育史研究のイロハはすべて湯川先生からご指導いただいたものである。

2つ目に、大学院の有志数名と定期的に読書会を開催した。当初はM2の秋ごろからアレント『人間の条件』を再読する、という形で始まり、その後は、D2にかけフーコー『知の考古学』、ハイデガー『存在と時間』を扱った。メンバーの出入りはあつたが、小玉ゼミだけでなく、田中智志先生や山名淳先生のゼミ生など

も参加した。コースではこれ以外にもゼミを超えていろいろな読書会が開かれていて、一人ではなかなか難しい思想系の古典を扱うことが多かった。フレイレ『被抑圧者の教育学』を読む読書会に参加し、第二外国語でちょっとかじっただけの極めて拙いスペイン語の知識をポルトガル語に応用しながら訳文の原語を探したことをよく覚えている。

このようにアルバイト、申請書執筆、ゼミ、読書会などで学期中の時間は矢の如く時間が過ぎていくが、自身の研究は進まない。この焦りに対し、いわば外堀を埋めるために教育史学会で学会発表を申し込んだ。発表内容は修論の一部であるアメリカ教育史部分を取り扱うこととした。アメリカ教育史専門の研究者が身近にいなかったため、自身の研究の新規性を客観視できず不安であったが、チャレンジすることにした。この部分の資料集めはM2の春頃に行っていたので、資料の読み直しや再収集に時間を取られ、結局8、9月の休み期間はこの作業に費やした。

迎えた9月末の教育史学会はオンライン開催であり、自室からZoom越しに発表した。同学会の大会にはM1のときの静岡大会（対面）に参加した経験があり、その時にフロアの厳しいやり取りを見ていた経験から随分緊張した。聞きに来て頂いた本ニューズレター同人の皆様にも大変勇気づけられ、幸いにもフロアの先生方から大変暖かく建設的な質問や意見を頂戴できた。普通であれば分科会終了後に質問頂いた先生のところに名刺を持って飛んでいくところだが、オンラインなので終了後すぐに会員名簿をもとに、御礼のメールをお送りした。ご丁寧にも返信をいただけたときは大変嬉しかった。

また、教育史学会の発表が終わり一息つくころ、懸案であったDC2の採択通知が舞い込んだ。D2,D3の生活費などを確保できたことはもとより、自身の研究方針が認められ、ある程度のキャリアパスが開けたようでほんとに安堵することができた。

3. 博士課程1年目～10月から年度末まで

秋学期も、春学期と同様、アルバイト、ゼミ、少しの時間の研究といった形で進んだ。順番が前後するが、小玉ゼミではロッシ・ブライドッティ『ポストヒューマン』に関連し、デヴィット・グレーヴァーのアナキズム論などを、小国ゼミでは成田龍一の歴史論をそれぞれ扱った資料を作成した。研究については、教育史学会発表原稿の投稿を目指し、改稿作業を進めた。原稿は11月に投稿した。

これらにも相応の時間が取られたが、この時期、最も力を入れたのは非常勤講師で担当していた東大附属の世界史Aの実践であった。世界史A(現行学習指導要領では歴史総合)は、近現代史を中心に扱う課程であり、秋以降は日本史分野も交えつつ、2つの大戦から現代までを扱った。授業自体はNHKの名ドキュメンタリー「映像の世紀」を軸にしながら、ツヴァイク『昨日の世界』、レイトン『アスピリン・エイジ』、ハス『運命の下の子』、ケンボウスキ『君はヒトラーを見たか』、山田風太郎『戦中派虫けら日記』、土屋芳雄『ある憲兵の記録』など、様々な手記やエッセイを扱い、当時の人々の目線から戦争へ巻き込まれていく社会を考えようとした。生徒の熱心な取り組みの様子やロシアのウクライナ侵攻が始まろうとした時局が重なって、授業準備に熱が入り、資料を図書館で探して読み漁り、プリントにまとめ、生徒と一緒に考えることを繰り返した。初めての教員経験であったことから1年間必死に進め、なんとか現代の諸紛争まで内容がたどり着いた年度最終授業日の早朝(深夜)、ウクライナ侵攻が始まった。生徒に侵攻について話したときのことは忘れられない。

非常勤先は中等教育学校であったので、当然2月末まで授業があり、学期末試験、成績処理を終えるともはや3月中旬であった。ちょうどこの年度末の時期に、投稿していた教育史学会論文の査読結果が帰ってきた。結果は「再査読」。一次査読でのリジェクトでなかったことにひとまず安堵した。この対応として、査読文とにらめっこすることがD2最初の課題となる。

(続く)

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

大東文化大学の管理運営についての理事会要請

— 昭和58年度学園運営方針から —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

1983(昭和58)年1月、大東文化学園の理事会において、創立60周年にあたって「昭和58年度学園運営方針」を承認し、全教職員に向けた「学報」第71号に、「学内通達」第12号として掲載したのであった。そのなかでも、「大学の管理運営についての要請」についてはとても重要な指摘であるが、残念ながら従前の大学史では取り上げられていない。そこで、同上の要請を紹介しておきたい。

【大学の管理運営についての要請】

1. 大学意思決定機関の改善について

現有の合同教授会は大学の意思決定機関として機能麻痺が起こっている。この改善について理事会は再三にわたり要請しているがいまだ実現を見ていない。大学が早急にこの改善を実現するよう要請する。なおまた、これに関連して大学公務の実行機関としての大学協議会の法制化も要請する。

2. 長期教育研究計画策定について

学園においては、昭和56年度において長期事業計画および長期財政計画を決定し、大学教育施設の拡大に着手し、教育環境の整備の具体化を進めているが、その内包となる大学の長期教育研究計画が整備されていない。これは本末転倒であり、このため大学運営の各面において停滞と混乱が見られる。大学がこの計画作業を急ぐよう要請する。

3. 研究水準の高揚について

a. 本学の建学の理念や学風にかかる研究

すでに運営の基本姿勢でも述べたように本学には学問研究の学灯がある。具体的にいうならば、東洋学の中心となることである。本来ならば文学部中国文

学科がこれを負荷すべきであろう。しかし現状においては、このみにこれを求めることは困難がある。そこで中国語学科、東洋研究所、書道文化センター等が相協力して具体策を探すなど最大の努力を要請する。このことは当然スタッフの補強や外国からの共同研究員の招聘なども加味する必要があるものと思われる。

b.学部の研究姿勢について

今日の大学における学問水準の評価は教員の研究業績の実態にあるといっても過言ではなかろう。本学のこの面に焦点を当てた場合、そのほとんどは学内発表機関に限られ、国際学界はもちろん、国内中央学界における論文発表が極めて少ない。この事実に照らし今重点指向すべきは国内中央学界にのぼる梯子をかけるという面であると判断される。このための条件として、物質的な援助もさることながら、学部附置の研究機関の在り方および学部における研究管理の対応などが大きな作用をなすものであろう。

c.大学院の質的充実

高度の研究・教育機関としての大学院は、大学に5年の前・後期課程3専攻、2年の前期課程2専攻を有するが、最近一部の学生間に意欲的な研究活動が行われているほかは、概して低調であり、博士の学位取得者を最近ようやく1人出したにすぎない。この際上記本学全般の研究水準の向上のためにも、また後継者養成のためにもその抜本的な質的向上策を樹立する必要がある。

d.大学附置の研究機関

大学附置の東洋研究所と書道文化センターはいずれも建学理念や学風の本質的な範囲と方向において研究成果を期待するものである。東洋研究所の組織は弱体であるので早急に充実強化するとともに散発性を排除し、求心的に効率的な運営を願いたい。とくに国際交流の密度をたかめ、共同研究などの成果を願うものである。書道文化センターについては、研究機関への体質転換を急いでほしい。

e.研修制度の検討

現在本学における教員研修制度については、長期・短期の海外研修制度が

あるのみである。58年度においては、国内研修をも含め全面的な改善をはかる必要があろう。

f.研究費配分の検討

本学においては研究費として一般研究費と特別研究費がある。一般研究費については、教員各自均等配分の慣習が残り、そうした点から厳しさを欠き、マンネリ化の感が見受けられる。また特別研究費が設定されて5ヵ年目であるが、ここにおいても図書や備品の購入に重点が置かれ研究に厳しさを欠いているむきが皆無とはいえない。こうしたことから58年度において全研究費の在り方について再検討する必要があると思われる。

4. 学生の奨学金および特待生制度の改正について

大学の奨学基金が準備されているが、現在これに対応する受け皿がない。また、学園の奨学金貸与制度についても需要者が激減している。現行の特待生制度をも含めて総合的に再検討の必要がある。

5. スポーツ振興と学生志気の喚起

大学において、スポーツの必要性は論をまたない。本学の学生はおとなしいといわれる。それはまた覇気に乏しいという評価でもある。健全な体力と気迫とに満ちた人物養成、また白熱の試合を応援することによって母校愛への求心作用を育てる必要がある。

6. 国際交流

今や大学の国際交流は常識となってきた。本学の国際交流については北京外国語学院とは順調であるが、その他については芳しいとはいえない。60年度に開設を予定している国際政治経済学部のためにもいっそう国際交流を盛んにする必要がある。

7. 附属学校に対する密着度を高める

高校、幼稚園を大学の附属として名実ともに備わったものにする。このためにはまず理念の一貫性を確立するとともに具体的な面においても一体化すべきである。

8. 新設国際政治経済学部設置認可申請について

新設学部の申請準備については、諸般の必要作業を進めてきているが、さらに積極的に作業を推進する。とくに教員スタッフの確保、図書の整備などに十分の配慮がなされるとともに新学部と既設学部との間にバランスの崩れをきたさないようにする。

実際、大学附置の研究機関であった東洋研究所では、1984（昭和59）年6月、広く学内教職員の理解と協力を得るための媒体として『東洋研究所所報』創刊し、以後年2回発行するものとした。さらに、同研究所では、国際交流講演会を1983（昭和58）年度から毎年定期的に行うものとした。加えて、1985（昭和60）年度から、研究成果の学生および地域社会への還元を目的とする「東洋研究所公開講座」（共通テーマ：アジアの民族と文化）を開設し、以後毎年1回3講座・3日間開催することとなっている。

大正時代の女子高等教育(72)

金城女子専門学校(2)——金城女学校の厳しい道のり

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

金城女学校に生涯を捧げたエラ・ヒューストン

1892(明治25)6月、初代校長児島亀士は彰栄女学校に転任のため退職し、岩永義太郎が第二代校長に就任した。翌年2月、後に第六代校長になるエラ・ヒューストンが1年の予定で高知より着任し、以後19年間金城女学校に尽力することになる。時代は国粹主義が台頭しキリスト教系の学校にとっては苦難の道となる。

1893年6月、岩永は札幌のスミス女学校へ転任のため、校長を退職。磯貝由太郎が第三代校長に就任した。磯貝は、同志社女学校で専門科文科教授の経験者だった。そこで同年9月、校則を改正し、予科3年、普通科4年、高等科1年とし、普通科修了者は高等科に入学できるようにした。高等科生はその教科目を自由に選択して、それぞれの方面の専門的学習をした。軍人の夫人も入学したようである。高等科新設のために、図書室を設置し、図書の購入を始めた。この高等科が後の「専門学校令」による金城女子専門学校につながる。

第1回卒業証書授与式

1894年6月29日午後8時から、第1回卒業証書授与式が大教場で行われた。卒業生は1名で、創立者アニー・ランドルフが始めた^{きぼうかん}冀望館の3名のうちの一人檜崎とした。

同年9月、新任教師を6人増員し、裁縫科(2年制)を新設した。裁縫・編物・刺繍・造花・図画・茶道・花・音楽等、欧風ではなく、日本人の日用に近いものを教授するとした。在校生に随時兼修させるとともに、普通科を取らずに随時受講でき、既婚者などの裁縫科だけの修了も認めた。国風が好まれる世の中の動きに対応したものであろう。また、磯貝は、同年7月から始まった日清戦争を意識し

て、体育の強化に努めた。放課後練兵場辺りまで歩いたり、夕食後芝生でクロッケーなどを行ったりした。

1895年6月、第2回卒業証書授与式が行われた。普通科卒業生4名、普通科撰科卒業生1名だった。この時の普通科卒業生の星野静枝と杉浦はるは高等科に進学し、卒業後金城女学校に残って貢献する。1896年6月、第3回卒業証書授与式が行



第3回卒業生の記念写真 1896年
(『金城学院百年史』より)

われた。高等科撰科卒業生2名、普通科全課卒業生4名、裁縫科卒業生1名、邦語科撰科卒業生1名の合計8名であった。1897年7月、第4回卒業証書授与式が行われ、卒業生は1名。1898年4月5日、第5回卒業証書授与式が行われた。この年から日本の教育制度に合わせて3月末に卒業式、4月に入学式を執り行うことになったが、この年の卒業式は4月になった。本科卒業生2名、邦語科卒業生1名、撰科卒業生1名の合計4名。1899年3月、第6回卒業証書授与式が行われ、卒業生は5名であった。このように少人数ながらも卒業生を世に送り出していた。

1899(明治32)年問題——相次ぐ発令

1899年、すなわち明治32年は、教育上の制度が次々と発令され、金城女学校の将来を決定する重要な問題が起った年である。明治32年2月7日に「中学校令」、翌8日に「高等女学校令」が公布され、続いて設備や学科に関する規則、教員に関する件などが公布された。

一方、同年7月17日に念願の条約改正が行われ、それと引き換えに外国人の内地雑居が認められた。それまで外国人は居留地内に行動が制限されていたが、国内における自由な居住、旅行、営業が許可されたのである。そのため外国人経営の学校が増加することを懸念した政府は、その歯止めとして、同年8月3

日、「私立学校令」を発令した。それにより私立学校教員は、教員免許を有する者か、国語に通達することを証明し、中等教育の女学校の場合は文部大臣の認可を受けなければならなくなった。外国人経営の学校の監督が強化されたのである。そして同日「文部省訓令第十二号」が發布された。これにより、官公私立の学校において、いっさいの宗教上の儀式を行うことが禁じられた。キリスト教を建学の精神とする各学校にとっては致命的だった。そのため、ヒューストンは同年7月に休暇で帰米する予定であったが、延期して、校主服部俊一、新校長池田勤之助たちと協議し、学校の方針を確認した。それは、「高等女学校令」にも「文部省訓令第十二号」にも抵触しない「各種学校」として、「私立学校令」による経営を行うという方針であった。また、将来のことを考え、校主服部俊一名義で東区白壁町4丁目2番地に校地を購入し、旧校舎の移転・増築の計画を立てた。それらを確認してから、ヒューストンは同年12月に休暇で帰米した。

新たに購入した白壁町の校地に、二階建4教室が増築され、1900年の夏期休暇中に移転した。同年9月に落成式が挙行された。それまでの家塾的な形態からようやく学校としての形態が整った。同年12月、ヒューストンが米国から帰校し、翌年2月、第六代校長に就任した。



第六代校長に就任した
エラ・ヒューストン
（『目で見える金城学院の
100年史』より）

1903年4月、校則を改正し、普通科4年、高等科3年とした。1900年に公布された「小学校令」の改正にともない、普通科入学資格を、それまでの尋常小学校（4か年）卒業から高等小学校第2学年卒業以上の者とした。これにより、1年増え、尋常小学校を含めると13年間学べるようになった。1903年3月27日に発令された「専門学校令」を念頭においたものであろう。

1894年に入学し、1903年に卒業した川喜多みねは、

…市内の他の女学校が本科四箇年の時、母校丈五箇年の為入学志望者が少くても校長は決して意見をまげられず、更に其上に二年或は三年の高等科を設けられて居ました。そして一組二十名以内でなければ本当の教育は出来ないと言ふ御考であつて、実に親切丁寧に教へられましたが、生徒も各自よく予習をして参りました。…

(『金城六十年史』より)

このように回想している。「母校丈五箇年」とあるが、川喜多が在学している時は、普通科4年、高等科1年であつたので、それを合わせて5か年と思つたのであろう。川喜多が卒業した1903年から普通科4年、高等科3年と改正された。これらのことから、金城女学校が高等教育をめざしていたことがわかる。また、ヒューストンの方針は、少人数で、注入式教育ではなく、必ず生徒に予習を命じた。予習を怠ると授業についていけないため、生徒は熱心に勉強した。「準備の無い勉学は駄目だ」がヒューストンの口癖だったという。

金城女学校の危機

名古屋市内で、金城女学校よりも後に設立された名古屋市立名古屋高等女学校(1896年設立、本科4年、専修科2年)、愛知県立高等女学校(1903年設立、本科4年、専修科2年)は、「高等女学校令」によって設立され、校舎、設備、免許状を持つ教師陣も充実していた。これらの学校環境で劣る金城女学校は1907年当時、定員200名のところ生徒数は69名であつた。1903年にミッション・スクールになったが、ミッションは「伝道学校」としてクリスチャンを生み出すのが第一の目的であつて、学校教育にそれほど熱心ではなかつた。宣教師の理事たちもようやく専門の教育宣教師の必要性を感じて、音楽専攻の訓練を受けた教師派遣を要請するようになった。

1904年3月、二階建の新校舎が落成した。1階に5教室、中央に大教場(講堂・チャペル)、2階は18人の生徒室と2人の教師室及び舎監室からなる寄宿舍であつた。建築費は総計約2,600円であつた。同年7月、ミッションにより「金城女学校憲法」が制定され、これに則ってキリスト教教育を実践する。

1908年2月、臨時理事会で、官公立高等女学校と同等の資格を持つ女学校にするために文部省の指定を受けなければならないことを決議した。そのために外国伝道局が金城女学校の政府認可を認めるように要請し、休暇で帰米するヒューストンに交渉権限を与え、必要な基本金増額の件が決議された。そして同年4月、校則が改正され、予科を廃止し、高等女学科本科4か年、補修科1か年、文科2か年とし、本科入学資格を尋常小学校（6か年）卒業生とした。音楽科は従来どおり随時学習させることになった。

地久節不敬事件

このような折、1908年5月28日、地久節（皇后の誕生日）祝賀式で、金城女学校の「地久節不敬事件」と言われることが起った。その真相を『金城学院百年史』によって概略しよう。

この日の地久節祝賀式で、「君が代」の代わりに「讚美歌」を歌い、「教育勅語」の代わりに「聖書」を読んでいた。このことが、同年4月に赴任してきた新任女教師によって市内の新聞記者に告発された。『新愛知』は6月1日の第1面社説で「奇怪の取沙汰 基督教女学校に於ける」と題して取り上げた。翌2日には『名古屋新聞』も取り上げた。『新愛知』は6月11日～26日まで、連日「売国奴」「不敬事件」などとして金城女学校を攻撃した。皇后の誕生日を祝う地久節で讚美歌を歌い、聖書を朗読し、祈祷し、皇后陛下御歌「金剛石もみかゝすは」を歌うという式のあり方はこれまでも行ってきたことであった。

実はこの時の『新愛知』の執拗な攻撃には裏で仕掛けた人物がいた。それは私立愛知淑徳高等女学校校長の小林清作であった。小林が大変可愛がっていた愛知医学校の学生柳原徹が、あるクリスチャンの投書によって退学させられた。そのことからクリスチャンを憎む思いを募らせて、キリスト教攻撃の材料を集めていた。そこへ金城女学校の地久節の祝賀式の情報をもたらした女教師の言に乗って、『新愛知』や『名古屋新聞』の記者らと図って攻撃に出たというのである。

市民、特に教育界の非難と攻撃が激しく、新聞『新愛知』による金城女学校への攻撃が3週間も続いたことによって、生徒の退学者が続出し、生徒数が38

名にまで激減した。そのため一時は名古屋の地を引き払って、神戸神学校と合併してはどうかという議論が起った。廃校寸前に追い込まれたのである。

参考文献

『金城六十年史』

『金城学院七十年史』

『金城学院八十年史』

『金城学院百年史』

『目で見る金城学院の100年史』

『金城学院創立120周年 金城学院大学設立60周年』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(12):

『最新全国学校案内』(明治44年)(1)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号からは、1911(明治44)年に内外出版協会より刊行された内外出版協会編『最新全国学校案内』を取りあげる。

同社からは、1908(明治41)年と1909(明治42)年に高橋都素武編『全国学校案内』が刊行されたが、この進学案内書では編者が変わっている。編者が変わったことにともない、構成も内容も大きく変わった。

さまざまな教育機関は、「学校篇 男子女子学校総覧」に掲載されている。なお、男子の教育機関のみならず女子の機関も掲載している点に変わりはないが、ここでは男子の機関のみを検討していく。

同書において予備校と見なせるものは、「三 東京所在私立高等及普通予備校」と「四 東京所在私立語学及数学専門学校」に掲載されている。「三」は予備校とまで題打ってあるので問題ないが、「四」は予備校としてみなされるもののみが掲載されている。「四」には研数学館が掲載されているが、東京物理学校は「二 東京所在私立諸専門学校」に掲載されており、受験準備に重きを置いているか否かで分かれている様子がうかがえる。今号では、「三 東京所在私立高等及普通予備校」の「高等予備校」に分類されているものと、「四 東京所在私立語学及数学専門学校」に掲載されたものを取りあげる。順番が前後するが、紙幅の関係によるもので、「三 東京所在私立高等及普通予備校」の「普通予備校」に掲載された正則予備学校の情報が長大なためである。

高等予備校

高等予備校は、高等専門の諸学校に入学せんとする者の為に予備教育を施す所で、現在六校あるが、各校とも大体左の諸学科を教授する。

倫理、国語、漢文、英語或は独語、数学、物理、化学、歴史、地理、博物、図画、体操。

入学者の資格は年齢満十七歳以上であつて、中学校、師範学校、甲種実業学校卒業、又は之と同等以上の学力ある者である。

今各校個々別々に、其の異なる諸点を以下に摘記しよう。

早稲田高等予備校（牛込区馬場下町）

早稲田大学の附属学校である。

学年は四月に始め、翌年三月三十一日に終る。之を左の三学期に分つてある。

第一学期 自四月一日至八月末日 第二学期 自九月一日至十二月末日
第三学期 自一月一日至三月末日

入学期は毎学期の始、学費は入学金一円、授業料毎月金二円、修業年限一箇年。

中央高等予備校（神田区錦町二丁目）

中央大学の附属である。

学年は四月一日開始、翌年七月十日終了。之を左の三学期に分けてある。

第一学期 自四月一日至七月十日 第二学期 自九月一日至翌年二月末日
第三学期 自三月一日至七月十日

入学は毎学期の始。学費は入学金一円、授業料毎月金二円五十銭。修業年限一年六箇月。

明治高等予備校（神田区錦町三丁目）

明治大学の附属である。

学年は四月及九月に開始、九月及翌年四月に終了。之を四学期に分けてある。入学は每学期及学年の始、学費は入学金二円、授業料毎月金二円五十銭。修業年限六箇月。

日本高等予備校（神田区三崎町）

日本大学の附属である。

学年は四月一日に始まり、翌年六月三十日に終る。之を左の四学期に分けてある。

第一学期 自四月一日至八月三十一日 第二学期 自九月一日至十二月三十一日 第三学期 自一月一日至三月三十一日 第四学期 自四月一日至六月三十日

入学期は每学期の始、学費は入学金一円、授業料一箇月金二円五十銭、修業年限一年三箇月。

東京高等予備校（麹町富士見町六丁目）

法政大学の附属である。

学年学期、入学期は明治高等予備校と同じである。入学金一円、授業料毎月金二円。

専修高等予備校（神田区今川小路二丁目）

専修大学の附属である。

学年は九月十六日開始、翌年七月十五日終了。入学期九月一日より十月十

日迄。入学金金二円、授業料毎月金二円五十銭、修業年限一年一箇月。

此の他、正則予備学校の正則補習科、甲種数学科、物理化学科、臨時受験部も高等予備校程度に属するものであるが、同校の教科が大半普通学科を主とする故、便宜上之を分載せず、普通部に併記することとした。

四 東京所在私立語学及数学専門学校

中学課程中、中途編入志望者の困難とする所は、蓋し英語、数学、物理、化学の諸学科であらう。それ故是等志望者の為に設けられたる学校は多々あるが、英語教授にて最も評判好きは、国民英学会（神田区錦町三丁目）正則英語学校（神田区錦町三丁目）日本基督教青年会英語学校（神田区美土代町三丁目）中央英語夜学校（神田区三崎町三丁目）などであるが、国民英学会、正則英語学校に就いては、今更紹介するまでもなく、又青年会英語学校、中央英語学校は、實際英語を教授するに於て大に特色がある。

校名		授業時間	授業期限	学費
国民英学会	中学一、二、 三年相当各 第三学期	夜間自六時 至九時	各三箇月 新学期開始	
正則英語学校	普通科 一、二、三、 四五年各三 学期	昼間自八時 至十二時 夜間自六時 至九時	各三箇月新 学期開始	入学金午前 一円同夜間 五十銭 月謝八十銭

青年会英語 学校	初等科中等 科各第三学 期	夜間 自六時至九 時	一箇年第三 学期開始	入学金一円 月謝一円
中央英語夜 学校	予科 普通科 第三学期	夜間 自六時至九 時	一箇年第三 学期開始	入学金一円 月謝一円

此の内中央英夜学校のみは会話のみ教授する。然し教師は大概外国人であるから、会話を学ばんとするには好都合である。

又数学物理化学を教授する学校には、正則予備学校（神田区錦町三丁目）東京数学院（神田区猿楽町）順天求合社（神田区猿楽町）研数学館（神田区猿楽町）東京英学院数学部（神田区猿楽町）等がある。其の中研数学館は奥平辰太郎氏、東京英学院は明治大学講師理学士根津千治氏之を主宰し、共に熱心教授の任に当りつゝある。

其の他福音会英語学校（京橋区西紺屋町）イーストレキ英語会話学校（麹町区飯田町四丁目）東京実用英語学校（神田区錦町三丁目）各私立大学外国語研究科等相応の語学校が沢山ある。

上記の諸学校は大概随時に入學せしめる。他の学科を教授する学校に比べると、総てに於て甚だ自由の点が多い。

次号では、「三 東京所在私立高等及普通予備校」の「普通予備校」に掲載された情報を検討していく。

「未完の教授学者」としての長谷川乙彦⑧

—欧米への留学—

はせがわ ようじ
長谷川 鷹士(上越教育大学)

本稿では長谷川の1914年4月から1916年6月までの留学の概要を検討し(1)、その後の研究への影響を考察する。

長谷川が官命によって、欧米に留学したのは1914年の4月であった。官命での留学は翌1915年11月までであり、以降は私費での留学であった(2)。『官報』に記された留学目的は「教育学研究」であり、長谷川の肩書も広島高等師範学校教授となっている(3)。しかし、長谷川は広島高等師範学校教授であるとともに附属中学校主事でもあり(4)、実際には教育学の理論的な内容を学ぶ留学というよりも、欧米の最先端の教育事情を見聞し、附属中学での教育実践を改善していくための留学になったと考えられる。

視察対象国はイギリス、アメリカ、ドイツであったが、最初の留学国であるイギリスに到着して、2か月ほどたった7月には第一次世界大戦が勃発してしまい、長谷川はイギリスに予定よりも長く留まることになる。

その結果、長谷川自身、「図らずも、ジョンブル気質と其の教育の実際とに就いては、稍詳に、之を見聞することを得た」と述べるように(5)、イギリスの生活文化や教育事情から強く影響を受けることとなった。当時の生徒や娘が回想しているように留学前散切り頭であったのが、帰国後は整髪油を使い、紅茶を飲むようになるなど、生活様式にもイギリスの影響は大きかったようである(6)。そして、教育についても、イギリスの、特にパブリックスクールから大きな影響を受けることとなった。

長谷川は留学経験をまとめた『戦後に於ける教育思想及方法の革新』において「英国は其の徳育に於て人物教育に於て他国に比類なき成績を挙げている」と述べ(7)、全10章中4章を割いて、主にパブリックスクールを中心としながら、

イギリスの教育事情を述べている。第一次世界大戦に際して、率先して軍隊に志願し、祖国のために命を懸けたのは生活困窮者でも、労働者でもなく「上流の紳士階級」であったと述べ、そうした「英国紳士」を育て上げたイギリスの教育に着目したのである(8)。

第一次世界大戦という未曾有の危機に直面し、その際のイギリス国民の「愛国的行動」を目の当たりにした長谷川は、日本の教育にもそうした「愛国的行動」をなしうる国民性の涵養を期待し、そのヒントを探るためにイギリスの教育の実情視察を重ねていくのである。

長谷川は2年弱の留学期間の大部分をイギリスで過ごすことになった(9)。特に敵国となったドイツ留学は叶わず、そのことは後々まで、長谷川の心残りとなっていたようである(10)。しかし、長谷川を「教授学者」としてとらえる本稿の視点からすると、ドイツに留学できなかったことはそれほど大きな問題ではない。むしろ、長谷川が「国民性と教育。時勢と思潮。此の二つは、戦時三閲年の留学中、常に、余が脳裏に往来して、最も深い、印象を止めた事項となつた」と述べるように(11)、留学が第一次世界大戦と重なったために、長谷川の問題関心が「愛国心の涵養」に偏ったことこそ、問題であった。イギリスなどの欧米において、狭義の教授法にどのような議論や実践があるのかに長谷川の関心があまり向かなかったのである(12)。すなわち、それまでは知育と絡んで教授法を捉えていたのが、留学中はとりわけ訓育に関心が向いていたのである。留学が第一次世界大戦にかぶっていなかったならば、これまでの論考で検討してきた長谷川の問題関心からして、知育にかかわる教授法についても長谷川は見聞を深められていたであろう。しかし、実際には、長谷川は欧米留学中、そういった点についてはあまり見聞を深められなかったのである。長谷川を「教授学者」としてとらえるならば、その欠落は重大な問題であった。

以上を要約するならば、長谷川を「教授学者」としてとらえる視点からすると、この2年弱の欧米留学はほとんどプラスとなるところはなかったと言えるであろう。

むしろ、長谷川の中で「教授学」よりも「愛国心の涵養」という課題を前景化させたという点ではマイナスであったとさえ言えるのではないか。

しかし、この欧米留学以上に長谷川の「教授学」研究の進展に影響を及ぼしたのは帰国後に持ちあがる母校と勤務校、東京・広島両高等師範学校の大学「昇格」運動であった。今回はこの高等師範学校の「昇格」運動への長谷川の関与と、そこで示された長谷川の師範教育論を検討する。

注

(1) 広島大学附属中・高等学校の『創立百年史』では「大正5年7月3日」に帰朝となっているが(広島大学附属中・高等学校『創立百年史』編纂委員会『創立百年史』広島大学付属中・高等学校、2005、p.315)、『官報』では6月「二十六日」帰朝と記載がある(『官報』第1181号、1916年7月8日、8面(1916年7月分p.192))。ここでは『官報』の記載に準拠した。

(2) 広島大学附属中・高等学校『創立百年史』編纂委員会、前掲、p.315。

(3) 大蔵省印刷局『官報』第435号、1914年1月13日、2面(1914年1月分p.178)。

(4) 留学中は主事の職務を果たせないため、1914年3月4日付でいったん、主事を解任されている(大蔵省印刷局『官報』第478号、1914年3月5日、2面(1914年3月分、p.82))。帰国後、1916年7月10日付で再び主事に就任している(大蔵省印刷局『官報』第1184号、1916年7月12日(1916年7月分、p.282))。

(5) 長谷川乙彦『戦後に於ける教育思想及方法の革新』松邑三松堂、1920、pp.2-3。

(6) 広島大学附属中・高等学校『創立百年史』編纂委員会、前掲、p.316。

(7) 長谷川、前掲、p.46。

(8) 同上、pp.47-48。

(9) 同上、p.2。

(10)「春山博士を悼む」『教育学术界』第72巻第5号、1936、pp.5 - 6。

(11)長谷川、前掲、p.3。

(12)もちろん、狭義の教授法に全く関心を持たなかったわけではなく、長谷川の主眼でもある個人に応じた教授法について、パブリックスクールの事例などに着目して、見聞を深めてはいる(同上、pp.105-108)。また帰国途中にアメリカに寄った際にカリフォルニア州立師範学校の自学主義に基づく実践なども見学していたようである(同上、pp.328-332)

資料から見る「教育」の歴史①

－『早稲田学報』－

やまもと たけし
山本 剛（有明教育芸術短期大学）

「新入学生諸君に告ぐ」『早稲田学報』第219号（1913（大正2）年5月、早稲田大学校友会）。

「諸君は、東京（帝国）大学に入学できなかったからといって、早稲田大学に入学する。東大に入れないので、しかたがないので早稲田に入る。そのような者は、この会場には一人もいないはずである。もし諸君のなかに不本意入学などという薄弱な気持ちで、この式に参加している者がいたら、今すぐに退出してもらいたい」

100年ほど前の1913年、早稲田大学入学式で、学長である高田早苗は高等予科の新入生に向けて激しく訴えた。原文は以下の通りである。

官立学校へ這入れないから私立学校へ行く。止むを得ず私立学校へ這入る。さう云ふやうな人は此中には一人もあるまいと思ふ。若しさう云ふ薄弱な考で此所に来つた者があれば、其人の誤りであるから、寧ろ直に学校を出た方が宜しい

高田は続ける。

諸君が、「私立大学の一員であると云ふことは大に光栄としなければならん」
早稲田大学は、1902（明治35）年9月の大学に準じた組織である大学部開校に先立ち、これに入学する学生のための予備教育機関として、1901年4月から修業年限一年半の高等予科を開設した（1902年に東京専門学校から校名を早稲田大学と改称）。高等予科の目的規定は「大学部二入ルノ階梯」と定め

られ、中学校の卒業者には無試験入学を許した（理工科の場合は試験があった）。つまり、先の入学式に集まった高等予科の新生は、将来の早稲田大学の学生である（この時は正式な「大学」ではなかったが）。

さて、当然のように、こうした無試験で入学を許す私学は、旧制高校などの官立学校と比較して、世間でも低く見られていた。

高田もその点は指摘する。たしかに無試験で入学できる早稲田の諸君は、官立の学生と比べて、「楽」をしている（「新生の覚悟」『早稲田学報』第207号（明治45年5月））。

しかし、当時の早稲田では、同校の「無試験」主義は「学校の誇り」であると謳う。そして、早稲田は私学であるが、中味は「決して官立の学校に一步も譲らない」と宣言するのである（「吾大学の抱負と教旨」『早稲田学報』第160号（明治41年6月））。

高田は、官立学校の入学試験を激烈に批判する。

世間に於て受験的教育を受け、其病毒に感染して居る人々は、学校へ這入るのに試験がないと、何だか気が済まぬ様に思ふ人がある様である

学校に入学するための受験的教育などというもので学生を選別することに意味があるのだろうか。重要なことは、入口ではなく、学校の中味のほう、とりわけ教育の内容・方法であろうと高田は言うのである。

さて、今日において一部の私立大学は志願者の減少で存亡の危機に直面している。大学入学者選抜では、一般選抜で入学者を確保できない私学もある。「受験的教育」によって、「病毒に感染」して、「試験」がないと「何だか気が済まぬ」筆者自身もそろそろ考えを改めなければならない。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらゐを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

さいたま市の片柳中学校ではキャリア教育を重視しており、中学1年生では未来の社会的な仕事を想像する授業を行い、2年生では地域の職場体験を通じて仕事のアイディアなどを提案するなどして、社会での仕事・労働職業を中学生自身が主体的に考える機会を有する狙いなのだ・という。2025年1月28日の東京新聞24面では、この片柳中1年3組の授業で、生徒らが5班(1班:建築家、2班:医療従事者、3班:保育士、4班:教師、5班:農業従事者)に分かれ、その仕事での困りごとを考えながら、それを解決する技術を有する未来の仕事を想像するというものであった。1班は全自動のAI建築家、2班は相手の気持ちが分かるハートフルドクター、3班は外国籍の幼児らに対して翻訳機能を持つロボがサポートするらくらく保育士、4班はさまざまな教師の業務を支援するロボット業務代行、5班は高齢者になっても農耕を苦にしない農業支援のロボ農業、を考案し、いずれもAIやロボットという時代にマッチしたテクノロジーを前提とした労働職業が主流になるのではないかと、現在の中学生らもしっかり想像しているのは興味深いでしょう。

(谷本)

去る3月23日、東京都墨田区のすみだ生涯学習センターで行われた「こんばんは 2003 上映とトーク in sumida」に参加してきました。映画『こんばんは』は、22年前の2003年に制作されたドキュメンタリーで、墨田区立文花中学校・夜間学級を3年の歳月をかけて、そのありのままの姿を描いたものです。第77回キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位、第58回毎日映画コンクール記録文化映画賞長編部門受賞、第1回文化庁映画賞 文化記録映画大賞受賞など数々の賞を受賞した作品ですので、ご覧になった方も多いと思います。

戦争のため教育を受けることが出来なかった人や外国からの帰国者、不登校者など16歳から92歳までの義務教育未修了の生徒が通う、平均年齢約70歳という夜間学級。後半は、そこに転入した16歳の伸ちゃんがクローズアップされます。小学5年生からいじめが原因で不登校になり、両親以外とは口をききません。先生や祖父母のようなクラスメイトがいろいろと話しかけても黙ったまま。しかし、徐々に表情がほころび、映画の最後で、国語の文章を読む伸ちゃんの声が小さいけれど聞こえたのです。笑いあり、涙あり、感動の92分間でした。

上映後、森康行監督、映画に出演した元文花中学校夜間学級の教師だった見城慶和さんと中村小十郎さん、そして、伸ちゃんこと秋元伸一さんのトークがありました。森監督は、

「撮影日程も終わりに近づき、もし伸ちゃんが最後まで言葉を発しなかったら、どうやって終わらせようかとひやひやでした。」などと裏話を披露されました。伸ちゃんは、映画では16歳の青年。今、目の前に立って話をする伸ちゃんは「39歳のおじさんになりました」と言って会場を笑わせます。声を出すのに1年半くらいかかった伸ちゃんが、この日「夜間中学校と教育を語る会」の会長に就任したのです。その成長ぶりと饒舌に会場から驚きの声と激励の拍手が起きました。

私は1年ほど前に、足立区綾瀬で行われた映画『新渡戸の夢』の試写会で伸ちゃんを知り合いました。新渡戸稲造・メアリ夫妻は1894(明治27)年に札幌で遠友夜学校を創立しました。遠友夜学校は、貧しい両親のもとに生まれた子供たちに無料で勉強を教える夜学校でした。新渡戸の友人や札幌農学校(現北海道大学)の先生や学生たちが無報酬で教壇に立ちました。映画『新渡戸の夢』は、そういう新渡戸夫妻の精神を現在も継承してさまざまな活動をしている人々を描いたドキュメンタリーです。その試写会が夜間中学校の先生方対象に行われた時に、私は元新渡戸文化中学校・高等学校の校長、『新渡戸稲造の至言』著者としてトークを依頼されたのです。そして交流会で、たまたま隣に座ったのが伸ちゃんでした。不登校だったこと、夜間中学校で救われたこと、昼間の高校に進学でき大学も卒業したこと、すべては夜間中学校の先生方やクラスメイトのおかげですと話してくれました。

私は『こんばんは』を観て、教育とは「待つこと」だと思いました。もちろん熱意ある教師と学びたいという意欲を持つ生徒がいて成り立つものですが、常に温かい目で見守り、言葉をかけ、花にたとえるなら、太陽や水を与え、固く閉じたつばみが自然に内から開くのを、忍耐強く「待つこと」も大切なのではないかと思いました。(長本裕子)

物事の「あいだ」に身を置いて考える実践者が執筆する「10代以上すべての人のための人文書シリーズである創元社「あいだで考える」の存在を知り、そのなかの1冊、いちむらみさこ著『ホームレスでいること 見えるものと見えないもののあいだ』(2024年)を読んだ。



著者の、いちむらみささんは、競争を強いられる暮らしよりもテント村のほうがずっと希望があると感じて、2003年に東京都内の公園のブルーテント村での生活に飛び込み、以来 20 年以上にわたってブルーテント村に住み、仲間とともに物々交換カフェやホームレス女性のグループを開き、国内外でジェントリフィケーションやフェミニズム、貧困などをめぐる活動をしながらブルーテント村での日常生活を続けているという。

さまざまな思いをもったホームレスの人々が仲間と力を合わせながら、どのように日常生活を送っているかについて、他の人々からは「見えない」ことが多い。それが排除や分断を生む土壤になると思われる。いちむらみささんは、ホームレスの生活の魅力や困難を、自らの見聞きし、経験してきたことをもとに、ていねいに紹介している。いちむらみささんは、本文だけでなく装画も担当していて、ブルーテント村での生活が、一層イメージしやすくなっている。このシリーズは、手にとりやすいサイズ、軽さ、手触りのよさ、印象に残る装丁など、「本を手にとってほしい」という気合を感じる。(富岡)

会員消息

年度末ということもあって、自身の研究室内を少し整理していたところ、偶然にも若い時に使用していたソニー製のデジカメを見つけました。いまは使用していないこともあってデジカメ用の接続ケーブルも直ぐには見当たらず、まして当のデジカメの記憶媒体がなんともいまや珍しい薄い長方形なメモリー・スティックでした。おそらく自身の学位論文作成時に収集していた画像データがそのメモリー・スティックには収められているだろう・・・と思いながら、それを確認するには、必要なカード・リーダーをスマホ通販で購入するしかないかと思いました。ですが、それより安価なのは、接続ケーブルを注文するのがよい手かな。

さて、昨年夏に亡くなった声優の田中敦子さんの追悼展が出身の前橋で行われていて、同じく声優の大塚明夫さんがその展示施設を見学し、第一声が「久しぶりだな、少佐!」・・・となつかしく語りかけたといえます。田中さんと大塚さんは、作品「攻殻機動隊」シリーズで共演していて、田中さんの愛称が主役の役柄にそった「少佐」であったこともよく知られています。Z世代の若者らには、「葬送のフリーレン」のフランメ役や「治癒魔法の間違った使い方」のローズ役といったほうが分かりやすいかもしれませんね。そういえば、田中さんが演じたローズやフランメ役も、愛情をもって若い主人公を厳しく鍛える教官であったのは興味深いです。両作品の第二期では、別の声優さんが演じるでしょうが、我われファンは演者としての田中さんのローズやフランメ役という存在感を忘れないでしょう。(谷本)

ある程度予想していましたが、1回分、投稿が遅れてしまいました。昨月号投稿予定で、準備していた会員消息を以下に引用(?)してみます(記録を見ると2月17日に書いてます)。

ある程度は予想していましたが、前回の消息で「今シーズンはもう雪が降らなかったらいいな」と書いたら、降りました。消息を書いている現時点は降っていませんが、予報上はまた数日間、雪が続きそうです。幹線道路は既に除雪されていますが、大学の人々が歩かない場所や、家の前の田んぼは除雪されておらず、前回の雪がそのまま残っています。そこに今回の雪が降り積もる形ですから、累計での積雪は1メートルを超えそうだなと思っています。

1か月たっているので結果は出ましたが、高田中心部では積雪は1メートルを超えました。大学の入り口にある大学名が書かれた「石板」?は半月近く雪に埋まっていたのですが、ようやく姿が見えるようになりました。つい最近まで大学近くの歩道が除雪されておらず、腰付近まで積もっていたので、通行に難儀していましたが、それも1週間ほど前に雪が解け、解消されました。しかし、これを書いている今日(3月17日)も霰が降っていました。

さて今回、ようやく連載を再開しました。これからが乙彦の後半生。教員養成史研究上も一応は知られている部分に入ります。次回以降は先行研究とは異なる乙彦像を描きつつ、なぜ、その教授学は「未完」に終わったのか、乙彦の論から見える近代日本の教員養成論の特質はどういった点なのかななどを論じる予定です。(長谷川鷹士)

新学期をむかえる準備が始まりました。授業のない期間には、あれもしよう、これもしよう、いろいろな計画を立てて…、積読の本も少しは読んで…。しかし、あっという間に月日は過ぎてしまいました。さて、本号から投稿をしたいと思います。ちょっとした資料を一つあげて、教育の問題を考えたいと思います。(山本剛)

25年ぶりに引っ越し(といっても歩いて1分の距離ですが)をして、モノとの付き合い方について見直すきっかけになりました。そんなことをしているうちに、残念ながら連載原稿が間に合いませんでした。次号で書きたいと思います。(富岡)